

# 解散お知らせ

なお奮闘されている諸党派のみなさん、各地各戦線で健闘されている諸運動団体のみなさん、そして  
広く労働者・住民のみなさん

私共、評議会的変革のための協働委員会より、私共の解散についてのお知らせを申し上げます。私共、  
ほぼ五五年にわたり活動してまいりましたが、近時、有力な同志が死去あるいは重病に陥るなどもあり、  
その隊列を減じてまいりました。何より、定期的な会議を行ない、情勢を議論し、できうれば発信・唱  
導をしていくという私共にとっての基本的機能を果たすことが難しくなっております。

そのため、去る五月下旬、協働委員会自体の持つていき方について総会を開いて討論し、正式に解散  
することを決定し、関係各位へ文書をもってお知らせして永年の御友誼に謝することといたしました。  
誠に有り難うございました。

## 1

私共は去る一九六七年年頭に、東京・後楽園の中央労政会館にて創立総会を持ち、社会主義労働者同  
盟として発足しました。議長格は故中村丈夫、書記長は故小塚尚男、機関紙担当は故藤原春雄の各氏で  
した。ベトナム反戦、大学闘争を中心とする六〇年代終盤の昂揚の中で、社労同は先進的に奮闘し、党  
派的にもいわゆる構造改革派四派協議(社労同、統一社会主義同盟、共産主義労働者党、統一共産同盟)  
に批判的に介在し、また共産主義者同盟、第四インターナショナル日本支部、日本マルクス・レーニン  
主義者同盟などと連携しながら、いわゆる新左翼八派統一戦線の一翼を担うこととなりました。学生戦  
線では、共産主義学生同盟と提携しました。

しかし、六九年後半の七〇年安保闘争の展開をめぐる総括から、急速に反対派が形成され、それが指  
導機関を占拠するという事態が発生しました。組織は混乱しましたが、翌七〇年夏、全同盟会議を開  
いて、分派Ⅱ社労同共産主義委員会を形成。さらに同年一二月に、東京・大井町の南部労政会館におい  
て、青年共産主義者委員会の創立総会を開きました。社労同は、指導機関を占拠した部分(機関紙『赤焰』  
を発行)、社労同機関紙名『新左翼』を続刊した部分、そして青共委(機関紙名を『曙光』に改題)として  
三分解することとなりました。

青共委の第一代委員長は佐山潤(Ⅱ故金井敏博)が務め、共産主義的党派への形成をめざして、「レーニ  
ン主義の新生」のスローガンを掲げました。実践的には焦眉の課題となっていた沖縄闘争に投入し、「沖  
縄人民自決支持!」の綱領的スローガンを打ち出しました。また、念願であった労働運動への再着手も  
始められ、左翼分裂少数派組合運動を突破口とすることが唱導されました。これら戦術面だけでなく、  
理論面、組織面でも新しいものを積み上げながら、青共委の活動は厚みを増し、第二代委員長、建部賢  
一へと引き継がれていきました。その頂点ともいえるべきものが、八〇年代に起こったポーランドの独立・  
自治労組「連帯」の大運動を支援する運動でした。また、綱領的スローガンとして「評議会共産主義」  
を掲げたことも特筆すべきことでした。これは、晩期レーニンから、ヨーロッパ革命を追求したグラム  
シ(かつてのイタリア共産党第二代書記長)へ至る第三インターナショナルの初期精神の追究を導きとし  
たもので、マルクス派共産主義を復興させる最後の旗となるものと思念されました。

## 2

しかし、八〇年代に入っていくと、大情況はしだいに悪転し始めました。「連帯」の大運動は、ソ連末  
期の激震と東ヨーロッパの流動の中に押し流されていきました。沖縄闘争、左翼少数派労働運動の残さ

れた可能性を追うことこそ必要で、共産主義的党派からさらに大きな革命党を建設する夢を描くことは、当面無理であるという判断が共有されました。「評議会共産主義」の戦術の時代を切り拓くことは困難で、評議会主義、評議会的変革の迂路を探るべき、という選択でした。その結果、九二年に組織再編がなされ、評議会的変革をめざす政治委員会へと、名称・規約が変更されました。ただ、その後八年の苦闘もなかなか奏効せず、沖縄社会大衆党への働きかけも絶たれ、「闘う現場労働者運動センター」も解散する、さらに地域政党方針も困難が多いと、四面楚歌の状況となり、そこに東欧―ソ連の大崩壊の否定的影響が浸透しました。政治委員会としての展望も見えないと、解散論が提起され、困難な議論となりました。結果として、評議会的変革のための政治グループの存続を求める部分が残り、九九年、会員登録を行ない、評議会的変革のための協働委員会(フェニックス・グループ)の発足総会を行いました。(第三代)委員長には大石和雄が就任しました。なお、社労同の創設者、中村丈夫氏はこの時なお存命で、協働委員会に再登録されました。

### 3

協働委員会では主客の状況から、理論活動、文筆活動をベースとした発信・唱導に力を入れることとなり、『曙光』を継続するとともに、理論誌的な政治同人誌として『21世紀への置文―新十年誌(01〜10)』を発刊しました。そして、同誌と『曙光』の蓄積を併せるかたちで、二〇一〇年一二月、統一戦線的な政治同人誌『置文21』の改題スタートを行ないました(於東京・神田神保町の源来酒家)。また、理論活動、文筆活動さらには出版活動の重点として、マルキシズム&ラディカリズム研究会、東京グラムシ會などへの貢献が挙げられますが、さらに独自のなものとして、以下の三項目がありました。①『曙光』及び『新左翼』のバックナンバー合冊本(全六冊)の作成、②中村丈夫氏(二〇〇七年死去)に関わる文献の整理・編集・出版(文献目録とその付録①)、後進の追想文集②、グラムシ論集③、軍事論集④、USB版遺稿集⑤、精選論集⑥——順不同)、③大学闘争の回想・顕彰⑦⑧⑨。

このような活動を二〇一〇年代末まで続ける中で、本お知らせ冒頭で記したような組織的困難化がすすみ、一九九九年、協働委員会第二二回総会において規約の簡素化と組織別称の変更(フェニックス事務局)を行ないました。以降、二〇年代への持久をめざしましたが、同志の損耗が続ぎ、事務所も撤収、今年五月の解散の判断に至ったわけです。

一九九九年の会員登録―協働委員会の発足よりも、すでに二三年が経過しました。その間、少なからぬ同志が逝去されました。しかし、一九六七年をもって始められた私共の事業は、実を結ばず、今、本お知らせをもって終止符を打たざるをえず、誠に紅涙を流しつつ筆を擱くところでございます。最後に、これまで財政面も含めて様々にご支援いただいたみなさまに重ねて御礼申し上げます。みなさまのご健勝とご健闘をお祈りいたします。

追伸 なお、政治同人誌『置文21』事業につきましては、編集同人のみなさまのご協力と、私共の残余の微力をもって、しばらく、資金力・執筆力・編集力・印刷力・配布力の続くかぎり継続していきたいと考えております。

また、協働委員会(フェニックス事務局)の解散に当たっては残務が生じないようにいたしますが、それに備えて、残務連絡先を左記のように設定いたします。

携帯080-3434-5301 大石

二〇二二年 五月末日

評議会的変革のための協働委員会

(フェニックス事務局)

(文献・注)

『新左翼』バックナンバー 合本(1冊)

No. 5 (一九六七年五月) ~ No. 45 (一九七〇年四月)

『曙光』バックナンバー 合本(全5冊)

- 第1分冊 No. 46 (一九七〇年八月) ~ No. 144 (一九八二年一月)  
第2分冊 No. 145・146 合併号(一九八二年四月) ~ No. 265 (一九九二年三月)  
第3分冊 No. 266 (一九九二年五月) ~ No. 344・345 合併号(一九九九年二月)  
第4分冊 No. 346 (一九九九年五月) ~ No. 402 (二〇〇八年九月)  
第5分冊 No. 403 (二〇〇八年十一月) ~ No. 412 (二〇一〇年五月)

中村丈夫氏に関わる文献

- (1) 『中村丈夫文書庫 97・99年整理分文書目録—時系列・帳簿式—』  
中村丈夫氏等文書目録作成委員会、B5判、54P、一九九九年二月一日、一〇〇〇円  
〈同付録〉『追憶の人々—伊藤律・保坂浩明・伊藤隆文・山口裕—』、中村丈夫記、A5判、30P
- (2) 『紙碑 中村丈夫—共産党から新左翼への70年—』  
中村丈夫追悼集刊行会、四六判、250P、二〇〇八年七月三十一日、二四〇〇円、彩流社
- (3) 『(研究資料) 中村丈夫氏グラムシ論集—歴史主義と政治の主体—』  
中村丈夫氏グラムシ論集編纂委員会、A5判、209P、二〇〇二年六月一〇日、一五〇〇円、フェニックス社
- (4) 『クラウゼヴィッツの洞察—中村丈夫氏軍事論集—』  
中村丈夫氏軍事論集刊行委員会、A5判、322P、二〇〇六年四月一〇日、二八〇〇円、彩流社
- (5) 『中村丈夫遺稿集』  
中村丈夫遺稿集作成委員会、USBメモリ、874P、二〇一四年二月七日、二〇〇〇円、フェニックス社
- (6) 『評議会革命への途—新左翼の理論家・中村丈夫精選論集—』  
中村丈夫精選論集編纂委員会、A5判、451P、二〇二〇年九月一〇日、三六〇〇円、社会評論社
- 大学闘争の回想・顕彰
- (7) 『回想の全共闘運動—今語る学生反乱の時代—』  
『置文21』編集同人・代表者大石和雄、A5判、318P、二〇一一年一〇月三十一日、二五〇〇円、彩流社
- (8) 『言っておきたいことがある—大学闘争45周年記念フォーラム報告集—』  
責任編集・前田浩志、B5判、66P、二〇一四年七月二五日、七〇〇円、大学闘争45周年記念フォーラム報告集作成小委員会
- (9) 『時をこえて語る—大学闘争50周年回想集—』(『置文21』特別号—No.43—)  
『置文21』編集同人、B5判、64P、二〇一八年一〇月三〇日、五〇〇円、フェニックス社